校長だより　**向日葵**　　７月２５日　廣渡一郎

◆◇◆海水浴◆◇◆

■今日も思い出話にお付き合いください。
子どもの頃の私にとって，夏休みといえば海水浴。
今は「海よりもプール」という人が増えているように感じます。
「海水浴」という言葉自体，あまり耳にしなくなりました。少しさびしい気もします。

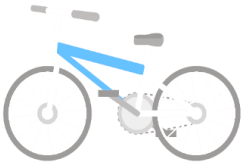
■昭和５２年。中学１年の夏のこと。
つるんでいた友達と海に行きたい，行こうぜ，ということになりました。
目的地は糸島，芥屋の海。　親に連れられて行ったときにあまりに美しかったので，
ここがいいよと私が提案しました。
ただ，親からはダメ出しされるに決まっています。なので，だまって行くことにしました。

■出発は家族が寝静まった夜中。

私は自宅で待機。友達が私の家に迎えにくる手筈となっています。
私の部屋は二階。お宮に面していました。真夜中。
外の木が揺れます。窓に小石がコツン。到着したぞの合図です。
足音を立てずに下に降り，台所の勝手口からそうっと外に出ました。
しめしめ，だれにも気付かれずにすんだようです。
リュックを背負って自転車にまたがり出発。真っ暗な道をすべり出しました。

■夜道をひた走る三台の自転車。
自宅から芥屋までざっと４０キロ。当時はコンビニも，深夜まで空いている店もない。
ペダルをこぎ続け，ようやく芥屋に着いたときには夜が明け始めていました。
さすがに疲れていたのでとりあえず寝ようと草むらに転がりました。
目が覚めると陽は高く昇り，顔にギラギラ照り付けていました。
「さあ、泳ごうぜ」水着に着替えて海に飛びこむ。泳ぐ，泳ぐ。
中学生男子三人で泳いで何が面白かったのか，今ではさっぱり分かりませんが，
とにかくひたすら泳いで楽しみました。

■「そろそろ帰ろうか」
お昼過ぎ。泳ぎ始めてずいぶん経ってから帰り支度を始めました。



帰り道の記憶はほとんどありません。ペダルは重かったはずです。
家に着いたのは夕方。晩御飯の支度が整おうか，という時でした。
「ただいま」何事もなかったかのように言う私に母が、
「お帰り…　あらっ，あんたえらい焼けとるね。何しよったとね？」
肝が冷えましたが何とかごまかしました。
あれから４５年。あのとき息子が自転車で芥屋まで行って海水浴を楽しんでいたなど，
母は夢にも思っていないでしょう。
今でも忘れられない，私の夏の思い出です。